

ことのは つづり

2024年春 特別号

なんどでも読み返したい。
宝物としての、教科書。

この資料は、令和7年度中学校教科書の
内容解説資料として、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則っております。

教室の窓
国語・書写版



令和7年度中学校
新教科書特集
「新編 新しい国語」
「新編 新しい書写」

東京書籍

内容解説資料

令和7年度
中学校

令和7年度
中学校教科書

特設サイトのご案内

東京書籍の令和7年度中学校教科書を紹介するサイトを公開しています。
Webならではのコンテンツも含め、新しい教科書の魅力を徹底紹介！
ぜひアクセスしてご覧ください。



「書く力」が「私の力」になる。

新編 新しい書写



書写はこちらから
アクセス

Webならではのコンテンツを
紹介しています！

60秒で
分かる動画

教科書活用
Q&A

押しQR
コンテンツ

資料
ダウンロード



「言葉の力」で未来をひらく。

新編 新しい国語



国語はこちらから
アクセス



東京書籍

ことのはつづり 2024年春特別号
2024年4月発行

発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リーフルテック

表紙絵・栗城由香

本社 〒114-8524 東京都北区堀船 2-17-1 Tel:03-5390-7464(国語編集部) Fax:03-5390-7350
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666 東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581 名古屋 052-950-2260
大阪 06-6397-1350 広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536 鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084
ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>

先生のための教育情報サイト 東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>

A6641

新しい教科書が手元に届く。
ぱらぱらとページをめくる。
ふと、手を止めて、
すこし読んでみる。

数年後、使っていた教科書を見つける。
あ那时的私、今の私。
ふと、手にとって、
すこし読んでみる。

教科書はいつだって、
今と未来をつなぐ宝物。



目次

ことのはつづり 2024年春特別号
新教科書特集

「新編新しい国語」	
●新教材紹介〈文学〉	
朝井リヨウさん	4
瀧羽麻子さん	6
温又柔さん	7
文学教材一覧	8
●新教材紹介〈説明文〉	
高木佐保さん	10
中島岳志さん	11
説明文教材一覧	12
読書へのいざない	14
「未来への扉」をひらく	16
短歌と教科書	18
「新編新しい書写」	
書写のすすめ	20
——対談・中学生に聞きました。	20

私たちの未来

▼「新編新しい国語 一年」40ページ



朝井リヨウさん

「桐島、部活やめるってよ」でデビューして以来、現代文学の第一線を走り続ける朝井リヨウさん。新しい教科書のために、中学校に入学したばかりの生徒を主人公にした、「私たちの未来」と題する小説を書き下ろしていただきました。朝井さんに、執筆の思いなどを伺いました。

——「私たちの未来」はどのように着想したのでしょうか。

自分自身を振り返ると、新生活が始まって環境が変わることに対して、すごく恐怖心を抱く子どもだったんです。周りの友達も、先生も、持ち物も、何もかもが変わって、一から新しい日々が始まる。あのときの、どちらかといえばわくわくした気持ちよりも、緊張や恐怖心のほうを再現できないかと思ってストーリーを考え始めました。

私の場合は、六つの小学校が一つの中学校に集まる学区だったので、クラスの中でも知っている人は十人以下。だから、新しい学校生活が始まったときに、目の前にいる人たちと友達という関係になれる日が来るとか、ぼきぼきの制服が自分の体になじむ日が来るとかいうことが、現実として全く想像ができなかったんです。心もとない、どこにいても落ち着かないあの気持ち。それを小説で描こうと思いました。

——小学校から中学校への環境の変化は特に大きいですね。

中学校に入るのが私はすごく怖かったです。小学校の五、六年生から中学生にかけての時期って、一、二年の差で体の大きさが全然違ってくるじゃないですか。姉や兄を通じて進学する中学校の雰囲気を知ることもある。同級生が、怖いかわさを話してくることもある。それで、どうやら中学校という世界は小学校と全然違うらしい、みたいな恐怖心が膨らんでいまし

た。部活が始まると、小学生のときにはなかった先輩・後輩関係のような文化も入ってくるし、世界がまるごと変わってしまう感覚がとても強くて、本当におびえていたんです。中学生になる直前の春休みは、これから無事に生き延びることができたらどうか、ということばかり考えていました。

——今回の小説に込めた思いはどのようなものでしょうか。

私は中学校に進学したときだけじゃなくて、小説家になったときも、社会人になったときも、とにかく環境が変わるときにすごく緊張しておびえてきたんですね。何もかも自分にとって新しくなった世界にすっかり適応している未来の自分が全く想像できないというか。でも、そんな中でも、「この、まだ何がどこにあるかも分からないような校舎にいつかあきあきするんだよな。」とか、「この、傷の一つも付けたくない新しいかばんをいつか平気で土の上に置いてたりするんだよな。」みたいに、一瞬、時空を飛び越えるような感覚に包まれることがあるんです。遠い未来にいる自分が「大丈夫、結局どこにでも慣れるから。」みたいに言ってくれる瞬間とか。きっと、新しい教科書を手にしている中学生の皆さんの中にも、緊張やおびえがちがちのかたがいらっしやると思うんです。そういうかたに、きっと大丈夫、と小説という形で伝えたい思いがありました。

——中学生への一言をお願いします。

国語の教科書には、たくさんの方が載っています。私は小中学生の頃から本を読むのが好きだったので、本からいろんなことを吸収していききました。大人になった今思うのは、そうしてたくさんの方の文章に触れてきて、損をしたな、と思ったことは一度もないということ。現段階で、人間は言葉でしかコミュニケーションを取れません。言葉の選択肢が多ければ多いほど、自分の気持ちを細やかに相手に伝えられますし、自分を守るための論理を組み立てることもできます。ですから皆さんにはぜひたくさんの方の文章に触れて、言葉の選択肢を大量に仕入れて、それをときには武器にしながら、ときには盾にしながらか、たくましく我が道を拓いてほしいと思います。

編集部より

朝井さんから届いた原稿を読んだときの衝撃は、いまだに忘れられません。誇張ではなく、「十年に一本あるかないか」の小説を書きいただいたと直感しました。ほどよい長さにまとまった、質の高い小説を載せる。国語の教科書を作るうえで最も難しいミッションの一つを、この小説はやすやすとクリアしてくれました。中学校に入学したばかりの生徒たちが、先生といっしょに、教室という場でこの小説を読み深める。こんなぜいたくな学びは、どこにもないと思います。(K・R)



あさい・りょう ○1989年、岐阜県出身。2009年、早稲田大学在学中に「桐島、部活やめるってよ」で第22回小説すばる新人賞を受賞し、デビュー。2013年「何者」で第148回直木三十五賞、2021年「正欲」で第34回柴田錬三郎賞を受賞。著書に「少女は卒業しない」「武道館」「何様」「スター」など多数。

提供…文藝春秋

——中学校に入学したときの印象はどうでしたか。

たくさんさんの小学校の出身者が集まったクラスだったので、本当に緊張していました。ただ、当時から本を読むことは好きだったので、新しい教科書が配られたときに、国語の教科書を、まず全部読んだことを覚えていきます。

——全部ですか？

入学して特に最初のほうは、休み時間などを持て余していたので、教科書を読むしかなかったんですね。きっと今も、当時の私と同じように、何かしている人々になりたくて教科書を開いている生徒さんがいらっしやるはず。そういう子たちがこの小説を読んで、少しでも「きっと大丈夫」と思ってくれるとうれしいです。

足跡 あしあと

▼「新編 新しい国語 二年」32ページ

瀧羽麻子 たきわ あさこ さん

少し不思議な物語から恋愛小説まで、魅力ある登場人物たちの心情の機微を温かな筆致で描く、瀧羽麻子さん。新教科書に掲載された作品と、小説への思いをつづっていただきました。



たきわ・あさこ ○ 1981年、兵庫県出身。2007年、「うさぎパン」で第2回ダ・ヴィンチ文学賞大賞を受賞し、デビュー。著書に「ありえないほどうるさいオルゴール店」「博士の長靴」など多数。

世界への入り口

▼「新編 新しい国語 三年」16ページ

温又柔 おん ゆうじゅう さん

小説家の温又柔さんは、台湾人の両親のもとに生まれ、三歳のときに日本に移住しました。もしも台湾で育っていたら、日本語は「外国語」になっていたかもしれない。温さんはそう語ります。「世界への入り口」としての言語について、お書きいただきました。



撮影・朝岡英輔

おん・ゆうじゅう ○ 1980年、台湾・台北市出身。3歳のときに家族と日本に移住し、台湾語、中国語、日本語の混じる環境で育つ。著書に「台湾生まれ 日本語育ち」「魯肉飯のさえざり」「私のものではない国で」など多数。

この小説は、もともとアンソロジーのために書いた。「もうサイアクだ！」というタイトルの児童書で、「最悪」な状況に追い込まれた子どもを描いてほしいという依頼だった。素直に考えるなら、子どもにとって——大人にとってもだが——怒られたり嫌われたり無視されたりするのはつらい。そこで、周りから褒められ認められ一目置かれていられるにもかかわらずつらい、という設定を思いついた（長く小説家の仕事をしていると、物事を素直に考えるのが苦手になってくる）。

主人公の行動については、ひよっとしたら賛否が分かれるかもしれない。共感する読者も、いらいらする読者もいるだろう。この後主人公がどうするか、いろんな可能性がある。いずれも正解はない。どうぞ自由に想像しながら読んでください。

ちなみに、本作では写真が重要な役割を担っている。そう意識したわけでもないが、後から読み返してみると、写真と小説は少し似ているところがあるような気がしてきた。

小説には、主人公の全生涯や、起こった出来事のすべては書ききれない。物語の始まる前も終わった後も、登場人物たちの人生は続いている。文字数の少ない短編は特に、どこに焦点を当てたらいいか、何を書くべきか、慎重に吟味しなければならぬ。そして写真もまた、目の前に広がる景色をまるごと収めるわけにはいかない。同じ風景を撮ったとしても、構図やピントのぐあいや光の加減によって、まったく違う

幼

幼稚園に通う前から、本のある場所が好きでした。本が並んでいると、ただそれだけで、どうしてだかうれしくなるんです。

小学校に上がって、国語の時間に、あ、から始まり、ん、で終わる四十六の文字を、一つ、また一つ覚えるにつれて、本の中に書いてある言葉が「読める」ようになってゆくと、本はますます、私にとって身近なものになりました。やがて私は、本とは、ここではないどこかや、今ではないいつかとながる「扉」のようなものだと感じるようになります。

目についた全ての「扉」を開くことはできなくても、扉は無数にある、と思うだけで、ちっぽけな自分を取り巻くこの「世界」は、途方もなく大きくて、豊かなのだと感ぜられるし、おもしろい本はいつだって、ありふれた私の日常が見せてくれるものよりもはるかに奥深い「世界」を伝えてくれる……要するに私は、お気に入りの本と巡り合うたびに、自分があたりまえのように目にしてきた風景のある細部が急に輝かしく思えたり、あるいは、自分ではうまく言い表せずにいた感覚を、もののみごとに表現するほかの誰かの言葉に救われたりしてきました。だからこそいまだに私は、自分のいる場所の狭さを感じて息苦しくなったら、本をめくりたくなります。本のかなたに広がる、今、ここにあるものとは別の可能性にすがってしまおう。

ところで、私は、ときどき、考えます。自分が、今、あたりまえのように使っているこの言葉——日本語——は、ひよっとしたら、

仕上がりになりうるだろう。どのように世界を切り取るか、というところに、小説家も写真家も工夫を凝らす。より鮮やかに、より印象深く、願わくは誰かの心に届くように。腕の見せどころともいえるかもしれない。

この小説も、冒頭から結末まで、たった一時間程度の話だ。しかも、何もかもが書いてあるわけではない（さらに、書かれていることばかりが大事だとも限らない。大事だからこそ書かざらぬ場合もある）。書かれていることを手がかりに、書かれていないことまで思い描いてみてもらえたら、筆者としてはうれしい。一枚の写真を見て、そこに写っている足跡は誰のものか、それはどんな人なのか、どこから来てどこへ行ったのか、とりとめもなく思いめぐらしてみたい。

編集部より

県の主催する中高生写真コンテストで、審査員特別賞を受賞することになった主人公。しかし授賞式の当日、不安は増すばかり。なぜなら、その写真を撮ったのは……。

揺れる主人公の気持ちを追うストーリーの結末は、「最悪」なのか「希望」なのか。生徒たちが、この作品をどう読み、どう解釈するのか、今から楽しみです。（O・N）

「外国語」だったかもしれない？

わざわざこんなことを考えるのは、私が台湾人であるからなのでしょう。

もしも、ここ日本ではなく、台湾で育っていたら、きっと私は、あいうえお、ではなく、ㄅㄆㄇㄏㄏㄏ、という発音記号から始まって、やがて今頃は、漢字だらけの中国語の文章が連なっている本ばかりを読んでいたはず……。「世界への入り口」は、そんな「もしも」について空想を巡らせたエッセイです。

今も私は、日本人としては生まれなかったものの、自分が最初に知った文字が平仮名——日本語——であったという、この幸福な「偶然」を大切にしたいと感じています。そして、日本語という言葉は日本人の中のみ根を張るものではない、ということや、台湾の外で育った台湾人としての自分のありようを、ほかでもないこの日本語で表現するのを試みています。そうやって私の書いたものがいつか本になったときに、この「扉」の先には、自分のまだ知らない今よりもっとおもしろい「世界」が広がっているはずだと誰かが明るい予感を抱いてくれるのを夢見ながら。

編集部より

教室には、さまざまなルーツを持った生徒がいると思いますが、温さんの随筆は、自明になっている「国語」について、改めて考え直すきっかけを与えてくれます。（K・R）

1年

言葉の学習

朗読の世界

魚住りえ

元日本テレビアナウンサーの魚住りえさんが、国語の学習の基礎となる「朗読」について、その魅力を語ります。国語の授業びらきに最適な教材です。



言語感覚

詩の心——発見の喜び

嶋岡晨

日常を再発見することで生まれる「詩の心」とは、近代を代表する詩人の作品を取り上げながら、詩を鑑賞する視点を育みます。

文学1

私たちの未来

朝井リョウ

中学校に入学したばかりの主人公が、前の席の生徒との交流を通じて価値観を変えてゆく。直木賞作家の朝井リョウさんによる新教材です。

文学2

さんちき

吉橋通夫

幕末の京都を舞台にした、三吉と車大工の親方の軽妙なやり取りが魅力の教材。描写をもとに場面の展開を読み取る学習に最適です。



文学3

少年の日の思い出

ヘルマン・ヘッセ／高橋健二・訳

ヘルマン・ヘッセの不朽の名作。「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」というエーミールの言葉が、いつまでも心に残ります。

資料編

トロッコ

芥川龍之介

そこに僕はいた 辻仁成

2年

言葉の学習

あの夕暮れへ帰る

原田マハ

人気作家の原田マハさんによる随筆。「日脚」という言葉や、モノの絵画を通して、季節や時の移ろいについて考えます。

言語感覚

短歌を楽しむ

道浦母都子

近現代の名歌を取り上げながら、短歌の楽しみ方を述べた文章。短歌を鑑賞するための視点を学ぶことができます。

文学1

足跡

瀧羽麻子

弟の撮った写真を自分の名前でコンテストに出品し、受賞してしまった主人公。授賞式を迎える主人公の葛藤を、鋭く描いた作品です。



文学2

字のない葉書

向田邦子

戦時下に生きる家族の愛情を描いた作品。登場人物の言動の意味について考え、作品を読み深める学習に最適です。

文学3

走れメロス

太宰治

「中学校の国語教科書に載っていた作品」といえば、誰もが真っ先に思い浮かべるのではないのでしょうか。王道の教科書教材を、新鮮な挿絵が彩ります。



資料編

坊っちゃん

夏目漱石

カメレオン アンTON・チェーホフ／原卓也・訳

3年

言葉の学習

世界への入り口

温又柔



台湾で生まれ、日本で育った筆者は、どのようにして「国語」と出会ったのか。「国語」とは、そして言葉とは何か、改めて考えさせてくれる随筆です。

言語感覚

俳句の読み方、味わい方

片山由美子

定型と季語によって支えられる俳句。近代の名句を取り上げながら、その味わい方を紹介します。

文学1

形

菊池寛

「形」による威光を失ったこととで討ち取られてしまった中村新兵衛。翻案の元になった古典作品も掲載しており、読み比べることができます。



文学2

百科事典少女

小川洋子

Rちゃんど、その父親である紳士おじさん。アーケードにある読書休憩室を訪れる人々と主人公との交流が、静かで巧みな筆致で描かれる作品。



文学3

故郷

魯迅／竹内好・訳

「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」人間、そして社会を鋭く描いた魯迅の名作が、中学校の文学教材の最後を締めくくります。

資料編

最後の一句

森鷗外

風の唄 あさのあつこ

ネコだって推理できる

▼「新編 新しい国語 二年」56ページ

高木佐保さん

動物心理学者の高木佐保さん。

飼っていたネコの観察をきっかけに、ネコは推理しているのではないかと考えるようになりました。そのことを検証するにはどうしたらよいのでしょうか。科学的に検証するということが、中学生への思いを語っていただきました。



たかぎ・さほ ○ 1991年、京都府出身。動物心理学者。教科書で取り上げた実験のほかにも、ネコは思い出を持っているか、ネコは同居している別のネコの名前を知っているかなど、ネコの心理に関する研究を行っている。

動

物が何を考えているのか、知りたいと思っただけではありませんか？ 私は小さい頃から動物が大好きで、動物と触れ合うたびに、「この子は今何を考えているのだろう。世界をどう見ているのだろう。」と思っていました。そのような幼い頃の夢がかなえられると知ったのは、私が大学に入ってからでした。心理学部に入学した私は動物の心理学という領域があることを知りました。その中で、生き物の知覚（見え方）・記憶・思考などの認知機能を動物間で比較し、その進化を明らかにしようとする比較認知科学という学問に出会い、とても感銘を受けました。動物がどのような世界を見ているのか、どのように人を認識しているのかを科学的に明らかにすることができると。そこから比較認知科学が専門の研究室に所属し、ネコの研究を始めました。今回、教科書の文章ではその成果の一部を掲載しています。

科学は批判されて洗練されていくものです。一つの実験だけで全てを明らかにするのは不可能に近いことだと考えています。データから得られた根拠を一つずつ積み上げ、真実に近づいていくのが科学の営みです。今回載せた研究は、私が最初に行ったネコ研究でした。研究室の先生や仲間と、一つ目の実験のままではこの可能性が除外できないのではないかと、その可能性を除外するためには、こういった条件が必要なのではないかなど、たくさん議論しました。私は三つ目の実験までしか行いませんでしたが、もしかするとまだまだ除外できていないほかの可

能性があるかもしれません。この文章を読んだ皆さんには、ぜひ四つ目の実験を考えてみてほしいと思っています。

中学生の皆さんは、毎日の授業やその宿題、部活動に習いごと、多忙な日々を過ごしているかと思いますが、私が皆さんに伝えたいのは、やらなければならぬことがたくさんある中で、好きなことに没頭する時間を大切にしたいということです。好奇心は人を含む動物を動かす大きな原動力です。今は、日常で生じた疑問はインターネット等を用いてすぐに解決できるかもしれません。その情報は玉石混交です。時間があるときには図書館に行って、興味のある本を手にとってみましょう。その分野を長年研究してきた研究者が書いた本は、インターネットの情報と違って深みがあります。抱いた疑問以外の新たな情報も手に入ることで、そのような時間を少しでも取れるように貴重な時間を過ごしてください。

編集部より

飼っていた犬が、喉が渴いたのか、水道前で水を流してほしいと目配せをしてきたことがありました。そのとき、動物ともコミュニケーションがとれるのだろうかという疑問を抱きました。動物を飼ったことのある人であれば誰もが抱いたことのあるこういった疑問を、これからも、どんどん解き明かしてほしいと応援しています。(O・S)

受け取る「利他」

▼「新編 新しい国語 三年」106ページ

中島岳志さん

評論文「受け取る『利他』」で示されるのは、身近なエピソードから導き出された、

全く新しい「利他」の捉え方。そもそも、政治学者である中島岳志さんは、なぜ「利他」について考え始めたのでしょうか。



なかじま・たけし ○ 1975年、大阪府出身。現代日本政治や日本思想史、インド政治などを研究。現在、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。著書に『利他』とは何か(共著)『自分ごとの政治学』など多数。

私

自身がまず興味を持ったのは、利他という概念が持っている、ある種のうさん臭さという問題でした。利他と聞くと、「自分の利益を度外視して、人のためにいいことをしなさい」というような、説教臭さやうさん臭さを感じると思います。また、利他的になろうと思えば思うほど、そこには「いい人と思われたい」といった利己が含まれてしまうものです。私たちが利他的であるということは、「いいことをしましょう」という話ではかたづけられない、とても深みのある、難しい概念だと思っています。

日本や世界の政治に目を向けると、この二十年ほどで「自己責任論」が非常に強くなってきました。その考え方の原点にあるのは、人間は理性や知性に基づいて自分で合理的に人生の選択をしていき、そこには責任が伴う、という近代的な人間観です。その結果、格差社会が拡大する中、弱い立場の人たちは「自己責任論」によってバッシングされ、苦しい立場に立たされました。この現状と向き合ううえでは、近代的な人間観そのものにメスを入れなければいけないと思ったのです。

私たちが本当に、何でもかんでも自分に関わることを合理的に選択してきたかというところではないと思います。例えば、私は大阪生まれの大阪育ちで、どうしても目立ちたがりウケようとしたりする気質がありますが、これも「大阪に生まれよう」「こういう人間になろう」と思っただけではありません。日本語を母語とし、日本語で思考していることも、

そのような環境に生まれたからであって、自分で日本語を選択したわけではありません。私の土台となっているもののほとんどは、意志を持って選択したものではなく、偶然性や環境によって付与されています。さらに、私たちはさまざまな人や作品に出会うことによって、どんどん変わっていきます。つまり、「私」は絶対的な存在ではなく、いろんなものに影響を受けて、次々に変容していく存在なのです。

偶然が絡み合って、いろんな立場に立たされた人がいる。苦しいところに追いやられている人がいたときに、「自分がその人であったかもしれない」という可能性に気づく。そのように自分をひらいていくことが、豊かな社会につながるのではないのでしょうか。利他の難しさを越えて、どのように世界をひらいていくことができるのか。この問題を政治学者として考えたかったのです。

「受け取る『利他』」というと、「何でも受け取ればいい」「どんどん受け取ることだ」と捉えられてしまうかもしれませんが、私の考えは、こうです。「もう受け取ってるんじゃないの?」そう自覚することで、利他の循環を動かしていくことができるのではないのでしょうか。

編集部より

利他の難しさを越えるための「答え」はありません。この問いと真剣に向き合う経験は、きっと人生の糧となります。(A・N)

構成・展開 オオカミを見る日 高槻成紀

地域や時代によって、オオカミのイメージが変化したのはなぜか。論理展開の明確な文章が、説明文学習の第一歩をひらきます。



吟味・判断 私のタンポポ研究 保谷彰彦

都市部で雑種タンポポが増えた理由を、植物学者である筆者が二つの実験から解き明かします。グラフと文章を関連づけて読む学習の基礎としても、ぜひ。



言葉とメディア ニュースの見方を考えよう 池上彰

池上彰さんが語る、ニュースづくりの内実。誰しもが日々膨大な情報を受け取り、自らも発信者となるこの時代に、必読の内容です。



資料編 「常識」は変化する 古田ゆかり

社会や時代の変化により「常識」もまた変わっていくことを、具体例とともに述べていきます。「オオカミを見る日」との読み比べもできる教材です。

構成・展開 ネコだって推理できる 高木佐保

動物心理学者である筆者が、繰り返し実験を行い、ネコに推理能力があるかどうかを検証していきます。グラフと文章を関係づけて読む力を養います。

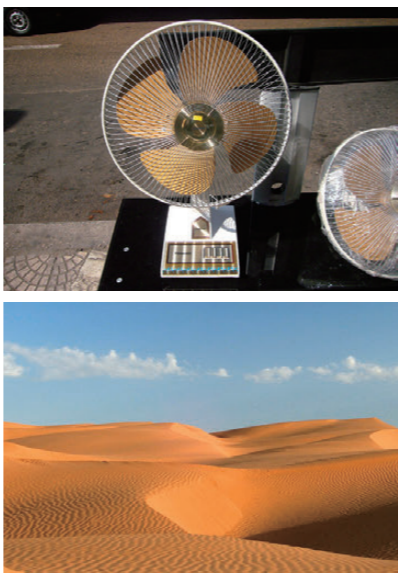


吟味・判断 黄金の扇風機 田中真知

「美」について書かれた二つの文章を読み比べる教材。筆者はエジプトでの暮らしを通して、さまざまな「美しさ」に気づきます。

吟味・判断 サハラ砂漠の茶会 千住博

アフリカでの出会いから「人間は皆同じである」と感じた筆者。読み比べを通して複数の視点を持ち、自分の考えを深めます。



言葉とメディア 「正しい」言葉は信じられるか 香西秀信

同じ事実でも読み手に異なる印象を与える言語表現。その表現の持つ「正しさ」とは何なのか？ 筆者の鋭い考察から、言語の本質に迫ります。



資料編 スズメは本当に減っているか 三上修

事実をもとに科学的な視点から「スズメは本当に減っているか」を検証していく筆者。グラフと文章を関連づけて読む力を活用する学習に最適です。

構成・展開 絶滅の意味 中静透

環境問題の一つである「生物の絶滅」。なぜ「絶滅」することが問題になるのかを、生態学者である筆者が丁寧に説明していきます。



吟味・判断 受け取る「利他」 中島岳志

「受け取る」ことで「利他」を生み出す。筆者のこの斬新な主張を、中学生はどう受け止めるでしょうか。批判的に読む力を養います。

吟味・判断 《資料》「利己」と「利他」 児玉聡

複雑な「利己」と「利他」の関係をひも解く。「受け取る『利他』」と重ねて読み、学習を深めます。



言葉とメディア いつものように新聞が届いた —— メディアと東日本大震災 今野俊宏

東日本大震災の混乱の中、それでも「伝えなくてはいけない」という思いから新聞を届けた新聞社の苦闘と苦悩。震災を記憶にとどめ、未来の社会になくために必読の教材です。



資料編 幸福について 野矢茂樹

ある日、「カイ」「トッポ」「グー」の三人の会話を耳にした「私」。幸福とは、そして議論とは。哲学的思考へと生徒を導きます。

短歌と教科書

空前の短歌ブームともいわれる昨今。東京書籍の教科書では、二年に「扉の短歌」というページを設けて、多様な短歌を紹介しています。「ちばさと」の愛称で親しまれる歌人であり、「新編新しい国語」の編集協力者でもある千葉聡先生に、掲載歌や、短歌の指導のポイントについてお聞きしました。

——「扉の短歌」に今回新しく掲載した歌について、ご感想をお伺いします。まずは、岡野大嗣《よく晴れた夏をゆつたり曲がつてくパスのすみずみまで蝉の声》はいかがでしょう。

岡野さんは、ほんの僅かな言葉で世界を大きく変えてしまう歌人です。この歌も、「角」ではなく「夏」を曲がるとしたことで、パスの隅々まで蝉の声が満ちている、というただそれだけの情景が、異世界めいて見えてくる印象を受けました。一方で、生徒たちに言わせると、「夏を曲がる」というのはよく分かる感覚だそうなんです。つまり「夏」は夏休みのことで、夏休みを無駄にしちゃいけないと思うからこそ、大切な人と会う時間とか、好きなことをする時間とか、そういう曲がり目を自分で入れていくんだって言うんです。生徒たちのそうした時間感覚や「夏」というタームの受け取り方にこの歌がいかにもマッチしているかと思うと、岡野さんは若い人の感性にどれだけ理解が深いんだろうと思いました。

まずは、女性の歌人が増えてよかったですと思っています。私が教科書で短歌を習ったときは、短歌も俳句も男性の作者ばかりでした。教室で学んでいる生徒の半数は女性だし、男性作家ばかり載っている教科書だと、それだけで興味を失ってしまう生徒もいますよね。女性の歌人は半数いてほしいですし、ベテランの歌人から若い歌人まで、年代を散らしてあることも大切だと考えています。あとはやはり、先ほどの千原さんのような恋愛の歌が載っているのがよいですね。生徒も自分の恋についてはなかなか語らないけれども、物語の恋については語るじゃないですか。ライトノベルや映画と同じようにして、短歌を通して恋について語ってくれるんじゃないかな、と思っています。

——千葉先生はどのようにして短歌のご授業をされているんでしょうか。

授業で最初に短歌を扱うときは、生徒に「今から言うことを静かに聞いてほしい。」と前置きしたうえで、岡野大嗣の《もういやだ死にたい》そしてほとぼりが冷めたあたりで生き返りたい》を紹介するんです。そうすると、生徒たちは笑うんですよ。で、「何で笑うの?」と真面目に聞いてみると、「もういやだ死にたい」って言いながら「生き返りたい」って言ってる。って返ってくるんです。そこから、短歌についての解釈が広がっていくんですよ。

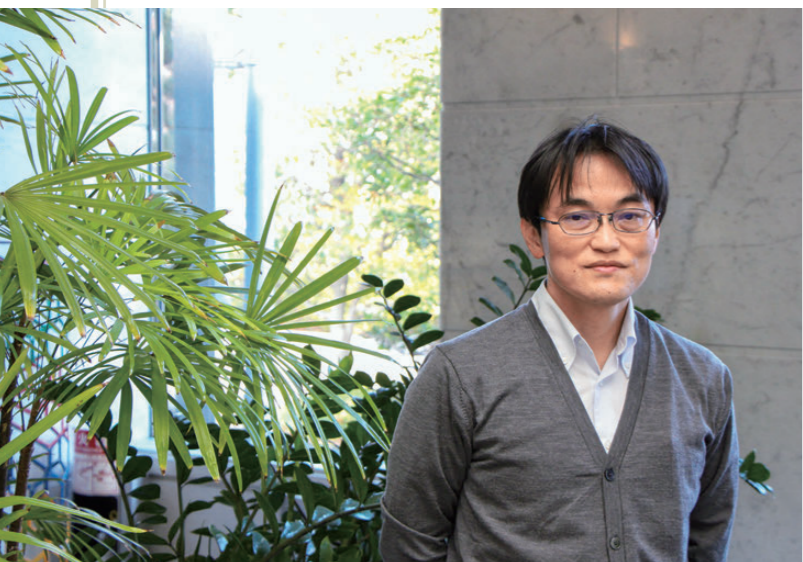
ほかに、杵野浩一の《色恋の成就しなさに

——服部真里子《幸福と呼ばれるものの輪郭よ君の自転車のきれいなターン》はいかがでしょう。

大きくきれいなターンで曲がる友達の様子という、何気ない瞬間の幸せを歌った一首だと思っっています。ふだんは自転車のターンの瞬間なんて注目しませんよね。せいぜい「何だか大きく回っているな。」とか、その程度にしか思わないけれども、見過ごしているものを的確に捉えて、それに「幸福」という最大限のよい言葉をあてがっているアンバランスさ。そこに、この歌の説得力があるんだと思います。恐らくこのターンの瞬間以外にも、「君はいろんな「輪郭」を見せてくれている。そういうものを、この歌の詠み手は見たいと思っっているのだから」とも感じられます。服部さんには、自分が削られてしまうような鋭い歌もときどきあるんですが、こんなふうにして、親しいつながりやなくしてはいけない瞬間を詠んでくれてもいて、信頼の置ける歌人だと思っています。

くらべれば 仕事は終わる やりさえすれば》を紹介すると、これも大ウケするんですよ。「仕事は終わる」を「授業は終わる」にすると、もっとウケる(笑)。この二首が、教室で投げかければ反応が豊かに返ってくる歌なんですけれど、そうして二首を並べて紹介すれば、こういうのを短歌というんだよ、ということをまず伝えることができます。その後で教科書に載っている短歌を紹介してもいいし、そこに生徒がおもしろがってくれる歌が一首でもあれば、短歌の授

ちば・さとし〇一九六八年 神奈川県出身、横浜サイエンスフロンティア高等学校教諭、歌人集団「かばん」所属。著書に「短歌は最強アイテム」、歌集に「微熱体」「飛び跳ねる教室」ドラマウンドを駆けるモーツァルト」など多数。



——千原こはぎ《距離を置く作戦実行中ですが月がきれいで話がしたい》はどうでしょうか。

この歌、めちゃくちゃすてきじゃないですか? 恋愛をしているときは、思いが強すぎると相手がいってしまうから、ちゃんと思いをかなえるには距離感が大切になる。でも、月を見たら、急に、「ああ、月がきれいで話がしたいな。」ってなるんですよ。これ、圧倒的な名歌だと思えます。千原さんはイラストも描けるかたで、「ちるとしふと」という第一歌集にはイラストも多く載っています。恋愛の歌もとても多いので、千原さんのその歌集を教室に持つていくだけで生徒はみんな目を留めてくれるし、読みたいて言ってくれるんです。でも、生徒に貸したら行方不明になっちゃって(笑)。こうしたいろんな分野で活躍をされている人の歌が載っているのも、よいと思いました。

——「扉の短歌」全体の掲載歌のバランスやバリエーションは、どのようにお感じになりますか。

業の取っ掛かりとしては成功だと思います。——短歌の指導に悩まれている先生もいらっしゃると思いますが、指導のポイントはありますか。

何でもいから三首紹介してみて、「どれでもいいから一首選んで、短い感想を書いてみようか。」って投げてみる。そうすると、中学生は発想が豊かだから、何でも書いてしまうんですよ。先ほどの岡野大嗣の歌にしても、「みんな読んで読んだときには楽しい歌に思えたけど、実はすごく皮肉な歌に思える。」とか、「もういやだ死にたい」というのがドラマの言葉っぽい。」とか、生徒自身の世界観が見えるような感想を書いてくれるんです。そういうのを集めて紹介するだけでも、授業の入り口になると思います。だから、指導される先生が、短歌には詳しくないからおおげづく必要は全くないと思っっています。生徒と同じフラットな立場に立って、仲間内で楽しむために話がしたいんだ、というスタンスで向き合うのがいちばんいいんじゃないでしょうか。

——貴重なお話をありがとうございました。



書写のすすめ

「自分の字は好きですか？」

中学生に
聞きました。

●上越教育大学教授 押木 秀樹



中学生は、書写の学習について
どんなことを感じているのでしょうか。

今回、三百人以上の中学生に行った

アンケートをもとに、「**新編新しい書写**」編集代表の押木秀樹先生と
青山浩之先生にお話を伺いました。

自分の字が好きな中学生は48%

——「自分の字は好きですか？」この質問には
さまざまな回答がありました。編集部としては、
自分の字が好きだという気持ちは、自己肯定感
につながる大切なものであると考えています。
この数字は案外高いようにも思えますが、半数
以上の中学生は自分の字が「好きではない」と
いうことでもあります。より多くの中学生に、
自分の字を好きになってもらうにはどうすれば
よいでしょうか。

押木 文字を書くときに、お手本どおりに書く
ことに捉われるのではなく、自分の字をより良
くしていくと取り組むこと。それが、自分の
字を好きになるきっかけになると思います。

青山 そうですね。「教科書どおりの字ではな
いから好きではない」ではなく、自分の字の良
さに気づいたり、良い方向に変わっていくこと
を実感したりすると、楽しさも生まれますね。

動作が整うと気持ちよく書ける

押木 中学生たちが自分の字が良くなったと実
感するには、書く動作が大切だと思っ
スポーツでもフォームがだいいで、それが整う
と速く走れるようになるのと同じです。良い持
ち方をして、良い動きで練習をすると気持ちよ
く書けるようになってくる。行書を学ぶときに、
そういった体験ができるとういです。以前、
青山先生が、ある動作で書くと言書らしく書け
て、字形が崩れないという授業をしていらっ
しゃいました。

青山 行書化できるパターンを中学生たちと探

す授業ですね。このパターンはこの漢字に使え
るよね、といったものを増やして行って、パター
ンで行書を書けるようにしていったんです。

押木 私は理論面からそれを分析してました。
その成果を東京書籍の教科書では、「行書の四
つの動き」として掲載してきました。基本パター
ンを習得すれば、多くの字に応用が可能で、速
く書いても読みやすさを保つことができると思
います。

また、その「四つの動き」を適切な動作で示
すこともだいい。先生が実演して見せるのもよ
いですが、デジタル教科書や二次元コードの動
画コンテンツは有効なツールとなります。

青山 そうですね。動きのパターンを理解して

行書の四つの動き

教科書26ページより



運筆動画



「速く書くと自分でも読めない」

青山 今回のアンケートの中で「速く書くと自
分でも読めない」という回答もありましたが、
それを受けて、単純にただ行書を学べば解決す
るとは言いきれません。小学校の高学年で点画
のつながりを学び、それを基礎にして、速く書
く動作を高めていくのが行書です。小学校の楷
書の学習から点画のつながりを意識化しておく
必要があります。

押木 小学校低学年では点画の書き方を学び、
筆順を勉強する。そして、筆順どおりに点画を
書き、そのつながりを意識化していくのが小学
校高学年の学習。これを行書で学ぶのが中学校
このように、学習指導要領では字の書き方を段
階的に学習できるようになっています。小学校
の学習は楷書が中心ですが、高学年で書く速さ
を使い分けることを学びます。それが中学校で
学ぶ行書に生きてくるんですね。

青山 ちなみに、行書の学習には時間制限を設
けるやり方があります。ゆつくり書く場合から
どれだけ時間を短くしていけるかを試してみる

点画の連続

●行書では、速く滑らかな動きで書くために、点画が連続することがある。

① 筆脈の実線化 筆脈が実線になって連続する。

② 直接連続 点画の終筆と次の点画の始筆がつながる。



と、感覚が変わってくる。時間を短くしていくと速さを楽しんで書くようになり、もっと短くすると点画の連続や省略といった行書の特徴が自然に現れてくる。そうやって行書を書く手立てとなる特徴を中学生たちといっしょに探していけるとよいですね。そこから「行書っておもしろい」「書くことが楽しい」につながるかもしれない。

そうして興味を持ったところで、文字を整えて速く書くための原理・原則である「書写のかぎ」に出会う。この「書写のかぎ」を集めると、速く書いても読みやすさを保った字が書けるようになってくる。そうして、自分の字が変化することをとおもしろいと感じるようになると、字を書く意欲が湧いてくる。これこそが中学校の行書指導の目指すところかなと思います。

になって……。でも、「新編新しい書写」では、そんな中学生に合う「書写のかぎ」を設けています。小学校から系統的に考えられている「書写のかぎ」をよく知って、中学生たちと実践してほしいですね。

読みやすい文字に歴史あり

青山 動きの話でいうと、王羲之の古典の名品「蘭亭序」の中に「茂」という字があります。王羲之は「茂」の字を遠回りしながら書いてるんです。最短距離を動くのではなく、遠くを通って大きく回るんだけど、そのほうが速く、効率が良かったりする。空間もつぶれていないし、流動的に見えるし、心憎いことにバランスも取れている。そういう美しさが、書く動作の中で生まれて現代に伝わり、私たちは美しい文字の規範としているんです。中学生たちが書く

美しい文字は一つではない

押木 アンケートによると、教科書の文字を見て、そのとおりに書くことが楽しいと思う中学生も一定数いるようです。そう考えると、書写の教科書に、美しい整った文字が載っていることはありがたいですね。整った文字を見て、こういう字が書きたい、どうしたらいいんだろうというところが、「書写のかぎ」を活用してほしい。青山 書写の目的は、お手本の美しさを習得することではない。そこは徹底していくべきですね。でも、美しいものに目を奪われたり、美しいものを目指そうとしたりするのは私たち人間の本質的なものかもしれない。「書写のかぎ」を使って、多様な文字を速く整えて書くことを目指すのが第一ですが、美しいものに憧れる気持ちも否定できない。「お手本どおりに書くこ

教材文字

教科書29ページより



場合も、動作の中で文字の形が生まれるといった感覚に触れることで、速く書くことと整えて書くことの両立が可能になると考えています。それを中学生が自覚するのも、先生が意図的に伝えるのもなかなか難しいんですが、今回の教科書でいうと、「行書の四つの動き」で少し体感してもらえるかもしれません。だから、その動きをきちんと身につけたときに、「自分の字が変わった」と感じられるのではないかと思います。

また、王羲之とほぼ同じ時代のもですが、「李柏文書」では、「口」の文字がつぶれたようになっていきます。しかし、王羲之の「口」は中の空間をしっかり取っています。こうした書き方を王羲之だけが始めたというより、それまでに一定の書の進展があって、紙もかなり普及してきた中で、書の動作性が変わり、皆が美しいと思える字が生まれてきたと考えるのが妥当ですね。……できれば、こんなことを中学生にも伝えていきたいんですけどね。

押木 「茂」の字を少し遠回りして書くのは、読みやすさのためでもあると考えられます。このように、書き方には文字文化が背景にあるというのを伝えていきたいですね。文字文化として、「王羲之」の名前を覚えなくてはいけないのではなく、そういった文字の成立過程を踏まえて、今の読みやすい字ができています。先人はいろんな工夫をしているな、というようなところを伝えていきたいですね。

青山 「おもしろいでしょ、文字って。紙が普



とが楽しい」と回答した11%の中学生にも、そうでない中学生にも、個別最適に学べる教科書であるといいですね。

押木 一方でアンケートをよく読むと、教科書の文字そっくりに書けたかどうかにこだわりすぎてしまう中学生もいるようです。一時間の学びの中の到達点を、手本どおりではないところに置いて、達成感を得られるようにすべきではないでしょうか。中学生にとって具体的にかつ段階的な、授業の達成目標。それを可能にするのが「書写のかぎ」だと思います。

青山 そうですね。小学校から字を書く経験を重ねてきて、小学校で学ぶ「書写のかぎ」はある程度身につけている。中学校になると、速く書くようになって字形も乱れて、手が疲れて嫌

— 昔の人もこうやって工夫したんだから、私も頑張ってみようかな、と思ってもらえるといいですね。本日はありがとうございました。

押木先生・青山先生のコメント

デジタル時代とはいえ、中学生にとって手書きの機会はまだまだあります。今後もキーボード入力か、手書きかは、場面や状況により選択されるものとなるでしょう。GIGAスクール構想の進展に伴って、手書きが紙と鉛筆に限定されず、タブレットとタッチペンを活用するような時代が来るかもしれません。用具や方法が変わっても、文字を書く力を高めていくことのできる教科書でありたいと思います。

